

主題：祝福とは何か

聖書箇所：使徒 3：12-26

3章で人々は、生まれつき足のきかない男がいやされ、喜んで神を賛美している姿を見た。有名な箇所である。使徒の時代の初期、最も大きなエピソードの一つだ。今日はここから「祝福とは何か」を考えてみたい。

この男がいやされたことはすばらしく、使徒達が主に用いられた、というしるしであり、人々が驚嘆したのも当然だ。ではその後何が起こったか。人間の熱狂である。その熱狂はペテロとヨハネに向かった。みな、彼らに力、または信仰深さがあると思った。確かに現在でもカトリックなどでは聖ペテロ、聖ヨハネなどとよばれ、彼らは聖人化されている。

しかし本人たちはどう思っていたか。「そうではない。」と断言している。「足なえの男が歩いたこと」と「自分の力、信仰深さ」は全く関係ない、ただイエスの御名を信じるといふ信仰だけがいやしたのだ、と説明した。彼らは自分たちに信仰のないこと、正確には自分たちの「肉」が決して信仰など持てないということがわかっていた。

マルコの16章にはその根拠が明らかにされている。主イエスの復活後、一緒にいた女達も、一部の弟子達も、そして十一弟子達でさえ誰一人、御使いや証人達のことばを信じていない。直接、復活の主に出会ったときに何とか認めただけだ。

主は私たちが信仰を持ち、その信仰深さによってことを成せ、などとは考えておられないと思う。ただ主イエスの十字架と復活が私たちに死後の裁きから救ったこと、そしてこの地上の人生においてもその主を頼る、つまり「自分にはできません。あなたがやってください。」と白旗をあげることで地上の人生が祝福されるということに私たちが心を向けることを願っている、のではないかと考える。

では祝福とは何か、「邪悪な生活から立ち返り、生きる」ことである。病気が治り、ビジネスが祝福され、人間関係が修復される、そして長寿を全うする、これらも祝福と言え、祝福かもしれない。しかし、それが必ずしも祝福と言えるかどうか、あやしい。人間の論理学では、「病気が治れば祝福されている」＝「祝福されていなければ病気は治らない」が真であり、「病気が治らなければ祝福されている」とか、「病気が治れば祝福されていない」という言説は偽になる。

しかし、信仰者においてはそれら全てが真である。つまり、病気が治ることと祝福とは何の関係もない。そして、それはつまりとて病気が治ることと信仰深さとも何ら関係がないことになる。

祝福とは邪悪な生活から立ち返ること、では邪悪な生活とは何か。使徒の3章22、23節によれば、預言者に従わないこと、すなわち主イエスに従わないことにある。主イエスに従わないこととは何か。主のことばを実行しないことか。ちがう。主のことばを実行できないことを認めないことである。

マルコの16章を感謝しよう。弟子達は全員例外なく主の復活を信じるということを実行できなかった。約3年半、キリストの生活を見、そのことばを聞き、奇蹟を共有した彼らにして、「信じなかった」のだ。ではわたしたちは？肉は当時の彼らと同じように信仰がない。当然主のことば実行できはしない。しかし、聖霊によってなぜか、信じる告白をし、信じる歩みに入り、何度も主の教えに背きながらも主とともに歩むことをゆるされている。そしてごく小さな信仰が「与えられた」。その信仰によって何がわかったか。自分では主のことばが実行できないことを認めたのだ。

今、邪悪な生活（自分が主の前に何かできると思うこと）から立ち返ったこと（自分は何もできないと認めること）ですでに祝福されている、これが私たちの人生なのだ。感謝しよう。